

日隆大聖人御縁軌全

〔資料紹介〕

3

(外題) 日隆大聖人御縁軌 全⁽¹⁾

京都本能寺 開祖日隆大聖人畧縁起
尼崎本興寺

一丁ヲ

日隆大聖人ハ越中比國産也。 桃井右馬頭尚儀同國⁽²⁾

射水郡 浅井之城主 斯波義将比娘を娶 二男を生。 兄父ハ

直之也。 次男則(也)隆祖大聖人也。 御母公ハ 斯波氏也。 御母公

ゆ宛み(也)もふニハ、 香衣乃僧 手に照輝比玉を持、 懷中

になげて曰。 今汝ニ 如意珠を與。 同夜ニ御父ま(也)夢み(也)もふニハ

一丁ウ

衣冠比貴人利力を授、 其後終ニ 御娠たもふ夏有(り)。 至徳貳⁽⁵⁾

甲子 乙丑十月十四日、 浅井城中に降誕志(也)もふ。 此(の)日、 壹人比

婦人、 自 小器をたけ(也)さゝ 城中に來て曰。 吾今日誕生乃

嬰子を扶護(也)ま(也)る。 御父大ニ喜ひ、 と(也)宛て乳母とま(也)もふ。

ま△白髮化老翁来りて、一刀を鞘乃袋ニ包て尚義に
さゆけて曰。汝此劍を持て邪賊を制すべしといふ所を

二丁ヲ

いまぞおそろさるゝ、忽所在を失。怪怖やしみて是を見みに、
往夜夢中感得乃實劍也。長一尺ほるよめて隆師代

御初名茂長一丸と奉レ号。是ま△一法一佛一菩薩人乃

秘興明一乘長瑞ずみびやうの。但ハ釋尊二月十五日

入滅、蓮師二月十六日誕生十月十三日示寂去△もふ。隆師ハ

十月十四日出胎したもふ。生卒乃次第、誠ニ白毫のあか。恐ろ

二丁ウ

履し〜南無妙法蓮華經。明德二年いま隆師七才ニ

して入學去△もふ。同五年、隆師ニ見△らせたもふ四月八日夜

御夢み△もふニハ、金色身人△の絲んとして座前ニ来ル。

大聖人座よりのたゆて、合掌作禮去△もふに、御頭髪

自落 おのずからおつる とおわへたもふに、御夢さ免おめがれを社やしろハ 乳母うははニつけて、父母に
まみゑて出家しんねをなせ免ゆるたまへつ社やしろバ、御父おやこそをゆゑゆるし

三丁ウ

たまハはせ。乳母うはは乃すなは曰い。君きみすでに家嫡かちやく有あ。なんぞ出家しんねを免ゆるシ

たまハはざるや。吾所持われしやうじ乃すなは經きやう有あ。幻君まげに献けんぜる□□(虫損)、ちん

さら箱はこをひらき、妙經壹部めうきやういつぶ所出したまへて、さゆけおそりたもふ。
大光明だいこうみやうをえちちたもふて、大音声おんじやう出して唱なて曰い。我等がうら亦また

當身たうしん自擁護じやうようご 受持じゆぢ讀誦どくじゆ修行しゆきやう 是經者ぜきやうしや 令りやう得安穩とくあんゑん
離諸りしよ衰患さいけん 消衆毒藥せうしゆどくやく。あゑいまいままおそららざるに、行所いぐところ あららせ。

三丁ウ

計はかり 去いるニ 是まこぎに鬼子母神けけん化現けげん也。尚儀しやうぎここ奇異きいヲ

みて則すなはち)出家しんねを免ゆるす。且かつまま始生しんせいたもふ時とき乃すなはち異人いじん附與ふよ

むる代實劍しろくを出だして、おきをたもふ。大聖人だいせいじん是こをうけて
即時そくじニ同國遠成寺どうこくゑんじやうじニ入いりたもふて、慶壽院けいじゆいんを師しとして仕つかへ
たもふ。二旬じゆんをあゑずして、一部八軸いちぶはつじやく通利とんりたもふ。同年ごんねん

五月十日辰刻ニ御剃髮(E) 染衣(せんい)して沙門(せもん)ニなりたもふ。御名を

四丁ヲ

深圓(じんえん)日立(りつ)と奉(う)レ申(まう)。後(のち)ニ自(みづかち)改名遊(かいかいめをほ)したもふて、慶林坊日隆(けいりんぼうにちりゅう)と奉(う)レ申(まう)。亦(また)一夜御(いちやご)也(あ)先(ま)み(み)もふに、高僧来りて首題(しゆだい)乃(のち)七字を(しちじ)あまかに書たもふて、掌(たなこころも) 中に取て曰(い)。是如意珠也(これにぎじゆ)。汝(なれ)ニ(E) (あ)おふと云(い)。是(こゝろ)る(る) 聡明百倍(しやうめいひゃくばい) 去(い)もふ。當始(とうしはじめりやう) 隆上人御歳(りゅうじやうにんごさい) 十八才、京都妙本寺ニ趣(そ)せたもふ。日存日道上人を師として(にっぞんにちどうじやうにんをしとして) 修學(しゆがく) 精神(せいしん)をぬきん(ぬ)て。日道(にちどう)八日存(はつにちぞん)此弟子也(こゝでせし)。俱妙本寺(きせうほんじ)此

四丁ウ

學侶也(がくりよ)。神力弘經(じんりきくきやう) 抄(しやう)ニ曰(い)。日存日道(にっぞんにちどう)此御師弟等(こゝでしにん)云(い)。両師(りやうし) 朝夕(あさゆふ) 深秘法(じんひのほう)門(もん)さゆ(ゆ)くと云(い)。應永廿三戌年十一月四日、妙本寺(せうねいにさんじゆしゆねん) 貫主(くわんしゆ) 霽公卒(せいこうそつ)したもふ。此時(このとき) 始(はじ)て本迹(ほんじやく)一異(ひと)乃(のち)評論(へいろん) 貫主(くわんしゆ) 霽公卒(せいこうそつ)したもふ。此時(このとき) 始(はじ)て本迹(ほんじやく)一異(ひと)乃(のち)評論(へいろん) おおぬ。大ニ(おほ)末法(まつぽう)比(ひ)しぎをうし(し)比(ひ)ふとす(す)あ。存道隆三師(ぞんどうりゅうさんし) 徒(た)、去(い)む(む)く(く) 汝(なれ)を陣(ちん)とい(い)る(る)とを、許容(きよよう)せず。是(これより) 隆大上人

寺を出て遊學去もふ。九 三井寺山門南都高野歴遊

五丁ヲ

しゝもふ事廿余年、ぬゝび京都ニかゝらせたまへて、陣
容を去もふといふども、執情深して御心ニ去も申さず
ゆゑ、妙本寺を出さたもふて、妙蓮寺ニ御入らせたもふ。是日像
師乃跡を去もふたもふや。應永廿五年亥年御歳卅五才、此時
大上人を利害せんとそのふを化有(り)。むそのに六人乃悪人を
かゝらひ去もふて利害をおこふしみに、所謂、西尾宮内

五丁ウ

田中藏人・櫻井彦十郎・吉川勝十郎・尾崎傳内・水野左衛門也。

此六人約速して、ある夜、隆師大聖人乃住防へ去れんで入、
むそのにうかゞん見るニ、壇上に奉レ掛御本尊を、
くゑ乃うゑニ 妙典を置、寂然として書をみもふ。
其軀 殊勝 且尊高也。六人乃者身比毛よだち、あへて
手をくゞす支あはず。時ニ壇上乃御本尊 光明照曜と

六丁ヲ

して大聖人乃頂上(おほいたまきうへ)に憑(たの)依(よ)むる事、何(なに)かを日輪(ひのり)乃東(あづま)居(ゐ)出たもふの如シ。六人乃賊(あせ)、不覺(ふかく)してかゝるを於(お)あし、大聖人(おほい)去(い)ゆのにうし後(あと)をみよもふて曰。汝(なほ)ハ何者ぞと申させ

たまへハ、六賊共おそれて、合掌(あがつしやう)、作禮(さくらい)、怒(ち)、刀劍(たちまといけん)をすて、乞(こ)慈愍(じみん)一(いっ)云。おまをりして去(い)むらくを御側(おのそば)をたがはず、随(ずい)侍(し)して兵士となつて、大聖人乃教化(おほいさきか)をたすける。大聖人

六丁ウ

此(この)をふ二ハ、ま(ま)外(と)二(に)目(め)を(を)残(のこ)す候(まう)をのちらん。む

さしく此住坊(このぢゆうぼう)二居(にゐ)居(ゐ)のらむをて、蜜(みつ)二(に)小袖屋(こすそゐ)何某(なになん)乃

家(いへ)ニ至りたもふて、土藏(どざう)比内(ひうち)ニ志(し)の(の)バ(は)拵(し)たもふ。御(ご)齋(さい)居(ゐ)此間(このまへ)

常(つね)ニスアマラ 食(た)したもふ。有(あ)時(とき)白羽(しろは)大矢(や)飛(と)来(き)ル。土藏(どざう)乃

そり二たつ。主人是をいぬかり、大上人へうかゞひ奉(ほう)へれ)バ

大上人笑(おほい)ハせたもふて曰。我(われ)尼(に)今既(いま)解(と)け。今(いま)心(こゝろ)を(を)えなつて

七丁ヲ

四方へ弘通(くわうつう)せんとて、すみやめに京都を出て、河内國(かみのくに) 茨田郡(あはだのこほり) 三

井村ニ説法教化（し）たも。去（こ）をふ。一村法流（はうりゆう）に（こ）き（こ）履（こ）して終ニ（つひ）精舎（しやうじや）（を）建（た）、
本嚴寺（ほんげんじ）と号（がうす）。應永廿八年御歳卅七才、撰（州）勅（こ）越（こ）させたまへて、
尼（尼）寄（し）辰巳（しん）乃（こ）濱（こ）ニ宿（しゆく）らせたまふて、則（ち）（ち）教化開導（まうけいどう）、米や竹中氏
小濱屋芝氏等（こ）一類（い）、一流（い）ニ歸依（き）し奉（こ）ル。此時、尼崎城主
細川左京太夫婦人懷（く）孕（はい）。城主常に男子を縁（こ）ごふ。相人

七丁ウ

うらな（ひ）て曰（い）。胎中（たいちゆう）ハ是（は）（れ）女子也。若（し）（し）男子を得（え）もふと
思（おぼ）免（し）さバ、有（あ）験（けん）乃（こ）僧（しやう）を請（こ）じて、佛神（ぶつじん）ニ（こ）い（こ）れり（こ）たもふ（こ）履（こ）しと。
小神（こ）乃（こ）およ（こ）願所（ねんじよ）ニ（こ）ゐ（こ）ら（こ）せ。太守（たうしゆう）是を聞（き）たもふて、（あ）ほ（ま）
縁（こ）くた（こ）ゆ（こ）ね（こ）を（こ）免（こ）た（こ）ま（こ）へ（こ）ハ、終（つひ）ニ（こ）辰巳（しん）比（ひ）濱（ひん）まで大上人（だいにん）を
得（え）たり。大守禮（だいにん）をなして、變成（へんじやう）男子（なんし）比法（ひほう）を願（ねん）（ひ）たをふ。
大上人（だいにん）を（こ）そ（こ）の（こ）に思（おも）たもふ（こ）ニハ、昨夜（さや）御夢（ごむ）み（こ）もふ（こ）ニ、五更（ごかう）に

八丁ヲ

ちんどうに吾名（おな）をよ（よ）願（ねん）ぢ（ぢ）去（こ）きり也。御眼（め）をひら（ひ）ん（て）是
をみ（こ）もふ（こ）ニ、只（ただ）光明（くわうみやう）、照室（てうしつ）耳（みみ）、首（かぶ）人なし。夢（む）さ（さ）免（こ）て異香（いかう）、尚（な）
室中（しつちゆう）に残（こ）。ま（ま）御夢（ごむ）み（こ）もふ（こ）夏（なつ）有（あ）（り）。三才（さんさい）斗（たう）化（け）童子（どうし）、こ（こ）ゆ（こ）

ぜんとして出来ル。白蓮華を二莖、焼くへ乃上に置去ルと
みもふ。二夢奇異也。終二是をきざたゞし、官館に
望ままりたもふて、たんせん茂、抽、たまへ祈禱を免を止

八丁ウ

遊したもふ。つねニ出産。平安ニして男子を生む。然ル所ニ
生き子、左乃手をひらかせ。翌日むらいてみるニ 隆師乃
あへたもふ所乃符也。此生子長号ニ細川武藏守勝元文安貳年
官領ニ成後ニ文明五巳ノ五月五十四才ニて卒ス
隆師大上人乃御望をたゆ終る。大上人
乃曰。一大精舎を宮建努んと此ミ。外に望なしと仰
たまへハ、太守則 八幡乃 社内をを切て大上人ニあへたもふ。

九丁ヲ

本門比戒壇院を焼く程ん免す。あゝにおみて、大上人
すみやめに八幡宮へ奉 法施。つらくこを拜する内ニ
僧形 乃神 影 有(り)。則錦 乃戸帳をかける。志のし半片也。
大上人あやしみて問曰。錦帳なんぞ半片なるや。禰巨
あへて曰。むのし四十年已前、當社傳來比神劍錦帳

半片はんぺんと俱ともニうしこけふ。所ところ々々、たゆたゆ録れきもぞむるといへ共ともいまだ

九丁ウ

相知しん申まをさすせと、奉ほう申まを上じやうむ、大聖人懷くはいちやう中ちゆうの寶劍ほうけん錦帳きんていとり

出したまへて是をみせたもふニ、祢ね宜まおぞ流ながれて曰いはく。すこしも

相違さむこまなく、當社あう往こ古この傳でん來らい化け靈れい劍けんまま錦帳きんてい化け一

半也。あゝにおゐて、大上人おほ人にんまじまじ免めん生せいきたもふ時、異人い人にんは是

則すなはち當社あう八幡宮はちまんみやう乃なり化現也。大上人おほ人にん深ふか信しん感かんままもふてきう

圍いかかうを改かて戒壇かいだんを造つくりたもふて、則すなはち本興寺ほんきうじ号ごうまま

十丁ヲ

八幡宮はちまんみやう化尊影けそんえいををああがあて、護法鎮守ごほふしんしゆうととままもふ。今に

尼崎本興寺にさきほんきうじ化け三十番神さんじゆばんしん内うちニ八幡大菩薩はちまんだいぼさつ乃なり尊影そんえい

別躰べつたいニ有あり。ああののふふニ、應永三十三年大上人御歳おほ人にん御歳ごさい四十四才しじゆしさい化け時、越

中浅井城之家來なかつかいじやうニ元成げんじやうと言者いものことあり。尼崎にさきニ來きりてか

なしみて大上人おほ人にんニに洗せんげげて曰いはく。不臣ふしん元助げんすけ叛逆はんぎやくをくハはぎぎて、

兄公直之公あにきみちのきみをかかむむけ、所領しやうりやう残のこうむむり。君早きみはや故郷こきやうニ

十丁ウ

かゝりたもふて、ほじ元軍を破り、あつめ不義乃逆臣をちう
 去はへとなんじて申上あはれつれ、大上人のつ化乃ふ二は
 吾今出家のみ乃身也。なんぞ軍賊くんとく化のむさをなさんや。然れ共
 汝が比ぞむ処をま是はれ孝道也。去はがむずん、むゆるべからむと
 自鏡みづかみをとりて十二年どうまう化童形 乃の本像をきざみ、元成二
 さつけてはもふ二は、是 予の全身也。可た以て為し主將。且も又

十一丁ヲ

期を不し延 跡あとをすみやめにゆあんと化まへは、元成ををつて
 越中へかゝり、元軍を集あつるに、且は先まとはらそふて来ル。
 元成をを聞て、大きにおそき、まは元助あへてた陣二
 不し及して罪つみ二ゆくして、自殺じこす。大上人も不しかは地へ
 至いたりたもふて、一賊臣家をさしてはもふ二は、家
 運既ニ 後のり。是又いかんとをすべからむ。終二改たて

十一丁ウ

父乃遺跡を寺としまふ。則ち、本光寺と号。本丸二塔廟
 建、元成てはえりして此寺二住。大上人はまは尼崎へ歸りたまはんと

去(こ)もふ二、諸臣(しよしん) 深(ふか) 見(み)のれる事を去(こ)のびせと申(まを)(し)ゞれむ、大上人
安撫(あんぷ)して代(か)もふ二、吾(われ)此木像(このまがた) おゝにおく也。則(すなは)(ち)是(これ)見(み)が生身(せいしん)也。
終(つひ)二袖(そで)を振りたもふて、帰路(きりかへ)去(こ)もふ。然(しか)る所(ところ)二越前色香濱(えちまのいろかほ)
御通り有(あ)り、此(こ)(の)時疫病(やまびょう) 流行(りやう)して村中死するを此

十二丁ヲ

数(かず)去(こ)ます。大上人(おほのうぢ)大石(おほいし)比(ひ)うへに座(ま)したまへて御祈禱(ごとうぎ)勇猛(ゆうまう)也。
病(やまひ)を此(こ)一時(いとき)二平愈(へいいう)する。村中寄集(むらぢうちあひ)り、みな一統(いっとう)二改宗(かしよう)して
法流(ほうりゆう)去(こ)もふか、一寺(いぢ)をあんぞうして、則(すなは)(ち)本隆寺(ほんりゆうじ)と号ス。
大上人(おほのうぢ)是(こ)る船(ふね)二危(あや)したもふて、敦賀(つるが)比(ひ)浦(うら)、御説法(ごせつぼう)利生(りせい)
去(こ)もふ。真言(しんごん)代徒(だいと) 大勝寺(おほしやうじ)圓海(えんかい)と難問答(なんもんとう) 三日三夜(さんじつさんや)、圓海
終(つひ)二屈伏(くつぷく)して、改宗(かしよう)す。寺(てら)改(か)めて本勝寺(ほんしやうじ)と名附(なづ)(く)。圓海

十二丁ウ

正法院(しやうふゑん)日住(にちぢゆう)と改(か)ル。是(こ)るして本勝寺(ほんしやうじ)を東國(とうこく)乃末頭(のまづ)也。永享元(えいかうげん)(年)
申(まを)大上人(おほのうぢ)御歳(ごさい)四十五才(しごじゅうごさい)、尼崎(にさき)二居(い)もふ也。此時(このとき)る 京都(きやうと)小袖(こで)や
宗句(そうく)来(き)り、逗留(たうりゆう)する事(こと)数十日(すうじゅうじつ)二およ(お)ぬ。聞法(もんぽう)生信(せいしん) 歡喜(くわんぎ)日日(にちじつ)
増長(ぞうちやう)す。小袖(こで)や京都(きやうと)へ帰(か)り、一大道場(いちだうじやう)を創(すづ)り、大上人(おほのうぢ)を止任(しじ)令(し)ル。

則(ち)本能寺是也。大上人移住(いぢう)畢(おほつて)、作(し)二四帖一抄(しやう)三(まづく、いつしやうの)周(あまはく)告(い)三(し)一宗(しやう)諸(し)寺(じ)一(ご)。
云(云)。後(ご)三(じ)條(じょう)西(せい)洞(どう)(に)う(う)焼(や)り(た)も(も)ふ。御(お)自(じ)作(さく)御(ご)尊(そん)像(ざう)有(あ)り。

十三丁ヲ

云(云)に(に)お(お)り(り)て(て)比(ひ)翼(よく) 両(りやう)輪(りん)此(この)本(ほん)院(いん)建(けん)立(りつ)成(じやう)就(じゆ)お(お)ハ(ハ)ん(ん)ぬ(ぬ)。同(どう)七(しち)年(ねん)寅(いん)、
大(だい)上(じやう)人(にん)御(ご)年(ねん)五(ご)十(じゆ)二(に)才(さい)、本(ほん)能(に)寺(じ)に(に)居(い)さ(さ)せ(せ)た(た)も(も)ふ(ふ)時(とき)、一(いつ)僧(そう)来(ら)り(り)て
と(と)な(な)へ(へ)て(て)曰(い)ふ(ふ)。本(ほん)門(もん)八(はち)品(ひん)上(じやう)行(ぎやう)所(しよ)傳(でん)南(なん)無(む)妙(めう)法(ぽう)蓮(れん)華(わ)華(わ)經(ぎやう)。大(だい)上(じやう)人(にん)聞(もん)ニ
此(この)唱(なう)声(せい)一(いつ) 數(すう)三(さん)末(まつ)曾(そう)有(あ)り。み(み)づ(づ)あ(あ)ら(ら)む(む)し(し)り(り)出(で)た(た)も(も)ふ(ふ)て(て)、と(と)ら(ら)じ(じ)れ(れ)ば(ば)
ひ(ひ)を(を)解(げ)た(た)も(も)ふ(ふ)て(て)、御(ご)た(た)づ(づ)絲(いと)有(あ)り(り)社(しゃ)ハ(ハ)、何(なに)方(かた)も(も)い(い)づ(づ)く(く)へ(へ)
御(ご)通(と)り(り)有(あ)る(る)ぞ(ぞ)。ま(ま)ハ(ハ)ハ(ハ)、名(な)字(じ)如(ごと)く(く)何(なに)も(も)ふ(ふ)し(し)候(こう)や(や)と(と)有(あ)り(り)社(しゃ)ハ(ハ)、一(いつ)僧(そう)

十三丁ウ

こ(こ)た(た)へ(へ)て(て)曰(い)ふ(ふ)。と(と)ら(ら)じ(じ)れ(れ)ば(ば)駿(しん)河(が) 岡(おか)み(み)や(や)日(にっ)朝(てう)也(だ)。大(だい)聖(せい)人(にん)乃(の)所(しよ)弘(くわう)乃(の)深(しん)
妙(めう) 成(じやう)夏(げ)茂(まう)聞(もん)、き(き)ハ(ハ)と(と)と(と)と、た(た)ち(ち)な(な)あ(あ)ら(ら)、一(いつ)問(もん)答(たう)茂(まう)と(と)ま(ま)へ(へ)ぐ(ぐ)れ(れ)む(む)、
大(だい)上(じやう)人(にん)比(ひ)ま(ま)へ(へ)ぐ(ぐ)る(る)ハ(ハ)、す(す)べ(べ)て(て)十(じゆ)三(さん)箇(か)條(じょう)こ(こ)を(を)あ(あ)ハ(ハ)へ(へ)た(た)も(も)ふ(ふ)。今(いま)
比(ひ)十(じゆ)三(さん)箇(か)問(もん)答(たう)抄(しやう) 上(じやう)下(げ)式(しき)卷(まき)是(ぜ)也(だ)。此(この)時(とき)も(も)し(し)て(て)光(くわう)長(ぢやう)寺(じ)と(と)
両(りやう)本(ほん)山(さん)と(と)永(えい)々(じやく)通(とう)達(たう)ま(ま)も(も)ふ(ふ)。亦(また)大(だい)上(じやう)人(にん)御(ご)年(ねん)五(ご)十(じゆ)五(ご)才(さい)之(の)御(ご)時(とき)
河(が)劬(じゆ) 金(こん)剛(かう)山(さん)乃(の)下(げ)二(に)ゆ(ゆ)め(め)せ(せ)た(た)も(も)ふ(ふ)。伯(はく)父(ふ)公(こう) 斯(し)波(は)義(ぎ)盛(せい)二(に)所(しよ)ハ(ハ)せ

十四丁ヲ

たもふ。則(ち)これ御母堂乃弟也。俱(とも)に⁽¹⁾おかりたもふて、一字を建(た)たもふ。是(れ)今(いま)乃(な)加納法華寺也。是(よ)して大上人たび(州)泉(すい)瑠(る)堺(さかい)へゆめせたまふて、教化開道(きやうか)去(さ)るもふ。聞者(きんしや)多(おほ)くして、捨邪(しやじ)歸(かへ)正(ただ)し。終(つひ)に⁽²⁾顯本寺を建(た)たもふ。日淨上人此(こ)の寺(てら)に住(す)たもふ。淨師者(じゆしや)御開山之親俗(おんかいしやんのしんぞく)にして、あもも上足也。是(れ)西國之末頭也。此(こ)の時(とき)大隅(おほすみ)種(たね)ヶ嶋(がしま)比(ひ)律宗僧(りつしゆうそう) 林應(りんおふ) ひさしく京都(きやうと)にて遊学(ゆうがく)して

十四丁ウ

たま(ま)く、此(こ)の顯本寺(けんほんてら)ニきて、日淨上人(にじやうじやうにん)ニまみゑ、終(つひ)に⁽³⁾日(に)昼(じゆう)夜(や)、宗(しゆ)旨(ぢ)乃(な)邪(じや)正(ただ)し。浅(あ)ろんじ、空(くう)々(げ)やくして、尼崎(にさき)ニ行(い)く、大上人(おほじやうにん)乃(な)高論(かうろん)ニ屈伏(くつぷく)して、たちまち律宗(りつしゆう)を捨(す)て、當流(たうりゆう)ニ改宗(かいしゆう)して大上人(おほじやうにん)乃(な)御(ご)か(ら)に居(い)る事(こと)、十年(じゆんねん)乃(な)間(ま)也(なり)。後(ご)に⁽⁴⁾種(たね)ヶ嶋(がしま)へかゝりたもふ時(とき)、淡路(たんろ)の僧(そう)日良(にちら)と誓約(せいやく)して曰(いは)く。且(ま)今(いま)種(たね)ヶ嶋(がしま)へ(へ)かゝりて、本化(ほんけ)比(ひ)宗門(しゆうもん)弘(ひろ)めんとおもふ間(ま)、かならず追(おそ)ひ

十五丁ヲ

き(ち)に⁽⁵⁾逐(た)ちたまへ。日良(にちら)か(ら)く約速(やくそく)して後(ご)に⁽⁶⁾三(さん)年(ねん)ニしてか乃(な)鳴(なる)へ行(い)たもふて、日曲(ひまが)乃(な)お望(のぞ)み逢(あ)ひを聞(き)いたもふに、不幸(ふこう)に

して、日曲ヒマそやく卒ソツシたもふ。又マタゆめに弘法クワフ乃ナリえしをむ
らく乃ノミ。廣流布クワルホに不フ及キして卒ソツしたもふゆへニ、日良
かどんと弘經クワキヤウ乃ナリたよりをうしななたもふ。深カク方便ヘンベンををふけ
たもふて、形カたちを改あらため、領主リヤウシュニ仕つかへ、茶道チャドウニなる時とき、宗儀シウギを談だんじ

十五丁ウ

たもふニ、日曲上人ヒマウヂノウジン代説法ダイセツポフとおなじ事ゆへニ、領主リヤウシュゆやしみたもふ。
日良ヒラ、他日日曲タヒツヒマ乃ナリ塚ツカニ、誦經ジヨウキヤウ 回向ケウキヤウ去シもふ時、塚中ツカナカ 鳴動ネウドウして
声コエを洗せんら絲いと、誦經ジヨウキヤウ 近邊キンペンニ聞きへる。大きにおど流ながき、左右サウヤウ(の)
人々ひとびと領主リヤウシュニこれを洗せんげふニ、領主リヤウシュ日良ヒラを免めんさき、たつ絲いとさせ
たまへハ、あゝにおめて日良ヒラを免めんじ免めんて實じつ 亶たふ茂しげ化けべたもふ。
領主リヤウシュたんじてやみたまハ、是こゝにして大きに法ほつ

十六丁ヲ

延のびをむらきたまへて、衆人シュジンを集あつめ聞法モンポフせし免めんたもふ。然る所こゝニ
一嶋イツシマあどくを本門ホンモン(の)宗旨シュジニ帰依ケイイして、本源寺ホンゲンジ 慈恩寺ジオンジ
大會寺等ダイエジトウ一百余院ヒツヤウイン建立ケンリウシタ去シもふ。是こゝ相傳サウデンりて、三嶋

みな我(が)宗門(しゆもん)化(くわ)檀那(だんな)也。種(しゆ)ヶ嶋(じま) 江(え)良(りやう)部(ぶ) 久(く)屋(や) 此(こ)を(を)茂(しげ)三(さん)嶋(じま)といふ。あど(あ)り(り)ぎに(ぎ)に

種(しゆ)ヶ嶋(じま)を(を)えらぬ(えらぬ)利益(りやく)益(えき)乃(の)嶋(じま)と云(い)ふ。有(あ)る(ある)年(ねん)異(い)國(こく)乃(の)賊(ぞく)船(せん)

此(こ)の(の)島(じま)代(だい)沖(おき)ニとまる。嶋(じま)人(にん)大(おほ)き(き)に(に)お(お)それ(それ)、一(ひと)嶋(じま)乃(の)僧(そう)侶(りよ)を(を)本(ほん)源(げん)

十六丁ウ

寺(てら)に集(あつ)め、賊(ぞく)船(せん)退(たい)散(さん)を祈(いの)る(る)夏(なつ)二(に)夜(や)二(に)日(に)也(也)。第(だい)三(さん)日(に)目(め)比(ひ)

日(に)、まゝ日(に)曲(まが)公(こう)乃(の)塚(つか) 鳴(な)動(どう)止(と)む。時(とき)ニ白(しろ)と(と)式(しき)羽(は)、忽(こ)然(ぜん)と

現(あら)れ、白(しろ)と(と)式(しき)羽(は)と(と)火(ひ)炎(えん)茂(しげ)えなつに

百(もも)餘(よ)乃(の)船(せん)、一(ひと)時(とき)ニや(や)き(き)う(う)せ(せ)ぬ。あ(あ)ま(ま)して(して)此(こ)の(の)嶋(じま)、毎(まい)年(ねん)正(せい)月(げつ)

十(じゅう)一(いち)日(に)二(に)夜(や)三(さん)日(に)御(ご)折(せ)禱(たう)の(の)由(ゆ)縁(えん)也(也)。さてまゝ大(おほ)上(じやう)人(にん)八(はち)本(ほん)興(きやう)寺(てら)ニ

居(ゐ)ま(ま)へ(へ)て、是(こ)を(を)弘(こう)法(ぽう)茂(しげ)西(せい)國(こく)に(に)む(む)ろ(ろ)め(め)んと(と)切(き)つ(つ)した(した)ま(ま)へ(へ)て、ま(ま)切(き)

十七丁ヲ

兵(へい)庫(こ)乃(の)津(つ)ニ行(い)せ(せ)た(た)も(も)ふ(ふ)て、町(まち)宿(しゆく)を(を)も(も)と(と)免(めん)た(た)も(も)免(めん)二(に)、宿(しゆく)比(ひ)宅(たく)主(しゆ)

あ(あ)し(し)ら(ら)い(い)鄭(てい)重(じゆう)也(也)。翌(あ)つ(つ)日(に) 己(おの)れ(れ)を(を)茂(しげ)け(け)て(て)曰(い)ふ。予(よ)、深(ふか)く(く)の(の)

厚(こう)志(し)茂(しげ)か(か)ん(ん)ず(ず)る(る)ゆ(ゆ)へ(へ)に、此(こ)の(の)物(もの)を(を)預(あづか)り(り)け(け)る(る)。但(たゞ)シ(し)風(ふう)呂(りよ)鋪(ぽ)也(也)。他(た)日(に)、我(われ)か(か)る(る)

きた(きた)み(み)ま(ま)で、茂(しげ)、し(し)ん(ん)で(で)防(ぼう)護(ご)せ(せ)よ(よ)と(と)云(い)ふ。是(こ)を(を)西(せい)國(こく)ニ(に)趣(そ)せ

たもふて、まゆ(まゆ)、備中(びちゆう)比國新庄村にい(い)りたもふ。村中(むらなか)乃(の)酋長(しゆうぢやう)川上道蓮(かわかみぢゆん) 江本蓮光(えほんれんこう)といふ。七月にせゆ(せゆ)さん(さん)供養をおこ(おこ)れふ。

十七丁ウ

大上人(おほおんにん)此(この)(の)供養(くじやう)乃(の)かりや(かりや)ニ入(い)らせたもふて、右(みぎ)之(の)酋長(しゆうぢやう)を比(ひ)と清談(せいだん)比時(ひじ)をうつしたもふ。終(つひ)ニ(ニ)、酋長(しゆうぢやう)大上人(おほおんにん)茂(も)ども比(ひ)ふて我家(わがや)に帰(かへ)り本門(ほんもん)比深秘(ひしんひ)を、とききあ(あ)な(な)たもふ所(ところ)ニ(ニ)、信伏(しんぷく)隨喜(ずいき)して、蓮光(れんこう) 道蓮力(どうれんりき)を(を)ほ(ほ)ハせ、仮(かり)に堂(どう)をいと(いと)なみ、村中(むらなか)比老若(ひらうじやく)を(を)ほ(ほ)つ(つ)允(いん)、聞法結縁(もんぽうけつえん)をせし允(いん)させたま(たま)へ(へ)ハ、一村(いちむら)みぞめて受戒(じゆかい)して、則(すなは)ち(ち)一院(いちいん)を創(つく)ゝす(す)み。是(こゝ)(れ)本隆寺(ほんりゆうじ)と号(ごう)(す)。

十八丁ヲ

一時(いちじ)に坊舎(ぼうしゃ)四軒(しけん)ニ成(な)ル。并(な)ニ大上人(おほおんにん)比御真筆(ごしんひつ)比御遺書(ごいじゆ)一卷(いっけん)残(ざん)ぞ允(いん)たもふて、是(こゝ)る讚(さん)ぶ(ぶ)卯辰(うたつ)比漬(じ)ニ(ニ)つ(つ)の(の)筋(せ)たもふて大(おほ)きに宗風(しゆうふう)を振(ふる)ハせたまふて、周(しゆう) 擊(げ)三毒(さんどく) 鼓(こ)一(いつ)。則(すなは)ち(ち)一院(いちいん)を創(つく)シ(し)たをふて、本妙寺(ほんめうじ)と号(ごう)(す)。塔頭(とうとう) 數十坊(すうじゆぼう)ニおよ(およ)ぬ。則(すなは)ち(ち)、大上人(おほおんにん)ま(ま)の御遺状(ごいじじやう) 有(あ)り。條目(じようもく) 之文詞(しもんじ)ハ、本隆寺(ほんりゆうじ)之御遺書(ごいじゆ)とおなじ事也(ことなり)。其(その)(の)略(りやく) 二曰(にいつ)。後代(こうだい)、京本(きやうほん)能寺(のうじ) 尼崎本興寺(にさきほんかうじ)、若(もし)(し)退轉(たいてん)比時(ひじ)ハ

十八丁ウ

備中新庄本隆寺 讚^(州) 勿^(卯)辰^(辰)代^(辰)本^(辰)妙^(辰)寺^(辰)茂^(辰)、西^(辰)國^(辰)阿^(辰)本^(辰)寺^(辰)と

何^(辰)を^(辰)ぐ^(辰)る^(辰)く^(辰)を^(辰)の^(辰)也^(辰)。享^(辰)徳^(辰)二^(辰)酉^(辰)年^(辰)、大^(辰)上^(辰)人^(辰)の^(辰)尼^(辰)崎^(辰)へ^(辰)帰^(辰)ら^(辰)せ

たもふ。ま^(辰)御^(辰)か^(辰)ゑ^(辰)り^(辰)が^(辰)け^(辰)ニ、兵^(辰)庫^(辰)ニ^(辰)旅^(辰)宿^(辰) したもふて、亭^(辰)主^(辰)ニ

御^(辰)た^(辰)ぬ^(辰)め^(辰)ん^(辰)遊^(辰)り^(辰)さ^(辰)ま^(辰)し^(辰)所^(辰)、亭^(辰)主^(辰)大^(辰)き^(辰)に^(辰)よ^(辰)ろ^(辰)こ^(辰)び、先^(辰)達^(辰)御^(辰)預^(辰)り

居^(辰)候^(辰)を^(辰)の^(辰)取^(辰)り^(辰)出^(辰)し、大^(辰)上^(辰)人^(辰)へ^(辰)差^(辰)し^(辰)出^(辰)ス。大^(辰)上^(辰)人^(辰)笑^(辰)ハ^(辰)せ^(辰)た^(辰)も^(辰)ふ^(辰)て^(辰)曰^(辰)。亭^(辰)主^(辰)

ま^(辰)あ^(辰)ぢ^(辰)に^(辰)正^(辰)真^(辰) 代^(辰)人^(辰)也^(辰)。今^(辰)ら^(辰)し^(辰)て、正^(辰)真^(辰)や^(辰)と^(辰)致^(辰)す^(辰)る^(辰)く^(辰)よ^(辰)し

十九丁ヲ

仰^(辰)き^(辰)社^(辰)の^(辰)、難^(辰)有^(辰)く^(辰)請^(辰)ひ^(辰)受^(辰)申^(辰)し^(辰)て^(辰)り^(辰)。あ^(辰)に^(辰)お^(辰)ん^(辰)て、大^(辰)き^(辰)に^(辰)宗^(辰)義^(辰)を

となへ、一^(辰)寺^(辰)建^(辰)立^(辰)有^(辰)る。す^(辰)な^(辰)と^(辰)ち、久^(辰)遠^(辰)寺^(辰)坊^(辰)舎^(辰)十^(辰)二^(辰)宇^(辰)。同^(辰)年^(辰)大^(辰)上^(辰)人^(辰)御^(辰)年^(辰)六^(辰)十^(辰)九^(辰)才^(辰)ニ^(辰)召^(辰)さ^(辰)ら^(辰)せ^(辰)た^(辰)も^(辰)ふ^(辰)時^(辰)ニ^(辰)當^(辰)り^(辰)て、尼

崎^(辰)本^(辰)興^(辰)寺^(辰)本^(辰)堂^(辰)乃^(辰)東^(辰)北^(辰)ニ^(辰)数^(辰)か^(辰)ゑ^(辰)乃^(辰)榎^(辰)木^(辰)有^(辰)。大^(辰)上^(辰)人^(辰)、朝

毎^(辰)ニ^(辰)、此^(辰)の^(辰)榎^(辰)木^(辰)代^(辰)下^(辰)ニ^(辰)、た^(辰)ち^(辰)た^(辰)ま^(辰)へ^(辰)て、日^(辰)天^(辰)子^(辰)茂^(辰)、拜^(辰)ま^(辰)せ^(辰)た^(辰)も^(辰)ふ。良

去^(辰)ば^(辰)ら^(辰)を^(辰)誦^(辰)經^(辰) 去^(辰)も^(辰)ふ^(辰)て、御^(辰)か^(辰)ゑ^(辰)り^(辰)が^(辰)け^(辰)ニ、此^(辰)の^(辰)榎^(辰)木^(辰)茂^(辰)数^(辰)ニ

十九丁ウ

御^(辰)手^(辰)を^(辰)を^(辰)り^(辰)て^(辰)な^(辰)で、御^(辰)か^(辰)ゑ^(辰)り^(辰)た^(辰)も^(辰)ふ。然^(辰)る^(辰)所^(辰)ニ、其^(辰)の^(辰)後^(辰)、八^(辰)月

十六^(辰)日^(辰)早^(辰)曉^(辰) 二^(辰)、門^(辰)人^(辰)ニ^(辰)命^(辰)じ^(辰)て^(辰)比^(辰)も^(辰)ふ^(辰)ニ^(辰)ハ、昨^(辰)夜^(辰)、予^(辰)の^(辰)偏^(辰)身^(辰)い^(辰)と^(辰)む

ことなをさし。若し榎木比損むる事もなきや。なんじとくゆきて
みる處し、と比もふ。門人則ち吟味して大上人乃許二歸り
昨夜ゆやまゆて、二枝をおきり。奇成の於。豈大上人比精
魂 木中ニやおふり入るやと、ぬじきに思ひきり。大上人自

二十丁

斧刀をとりて、此の榎木ををつて、自比像をきさまなしたもふ。

泉州堺の佛工 淨伝、刀合数年處て、像成就したもふて、
大上人自、點眼供養遊さ。すなハち今比尼崎本興寺
文庫堂乃 尊像是(れ)也。大上人比御遺言に比もふハ、此の像
ゆ座ん所を、予のたましん有(り)とおもふ處しと仰せたもふ。
没後ニ、靈驗奇瑞ゆけてかぞへるらむ。或年、近隣乃

二十丁

禪寺、類焼ニおよぬ時ニ、すでに本興寺ニうつらんとする時、實
塔比下ニ僧有。其の色、えなえぞ黒し。老年八十才斗と
み處て、水をあうて火をぬせぐ。其のえぞ飛鳥比
如シ。焼亡終ニ止(む)。翌日、隣寺乃僧きたりて、禮を比へる。

二十二丁ヲ

まゝその僧^(に)茂^(を)たづね^(て)、礼^(れい)謝^(しゃ)せんと、寺中^(じちゆう)をさ^(さ)の^(お)祈^(ね)
とを、元^(もと)の如^(ごと)此^(こゝ)。此^(こゝ)僧^(に)みまなく、人^(ひと)み取^(と)ぬしん^(ん)を^(を)やらざりしが、
(不考)

其^(その)の^(の)後^(ご)、大^(だい)上^(じやう)人^(にん)乃^(すなは)尊^(そん)像^(ざう)を奉^(ほう)レ^(は)拜^(はい)ハ、尊^(そん)像^(ざう)ニ^(に)す^(す)み。ど^(ど)後^(ご)ニ^(に)け^(け)の^(の)れたも^(も)ふ。

誠^(まこと)ニ^(に)當^(たう)時^(じ)乃^(すなは)貫^(くわん)主^(しゆ)。找^(たう)え^(え)じ^(じ)先^(せん)、み^(み)な^(な)人^(にん)と^(と)か^(か)ん^(ん)る^(る)に^(に)、き^(き)を^(を)に

て^(て)の^(の)し^(し)り。貫^(くわん)主^(しゆ)。尊^(そん)像^(ざう)を清^(せい)め奉^(ほう)りて、後^(ご)ニ^(に)、一^(いつ)堂^(だう)を^(を)い

ぜ^(ぜ)な^(な)み、奉^(ほう)レ^(は)安^(あん)置^(ち)シ、且^(かつ)ハ御^(ご)真^(しん)筆^(ひつ)乃^(すなは)御^(ご)經^(きやう)を^(を)お^(お)さ^(さ)先^(せん)の^(の)ゆ^(ゆ)へ^(へ)ニ、

文^(ぶん)庫^(こ)堂^(だう)と奉^(ほう)レ^(は)名^(な)附^(ぶ)。大^(だい)上^(じやう)人^(にん)恒^(ねい)ニ^(に)門^(もん)下^(げ)ニ^(に)お^(お)し^(し)る^(る)たも^(も)ふ^(ふ)ニ^(に)ハ、天^(てん)下^(か)

安^(あん)泰^(たい)を^(を)祈^(ね)り、時^(じ)機^(ぎ)相^(さう)應^(おう)化^(け)妙^(めう)法^(ぽう)を^(を)先^(せん)、武^(ぶ)運^(うん)長^(ちやう)久^(きう)を^(を)

二十二丁ヲ

願^(ねん)ふて、下^(げ)種^(しゆ)即^(じやく)佛^(ぶつ)乃^(すなは)要^(やう)妙^(めう)ヲ^(を)唱^(なむ)へんと、深^(しん)心^(しん)に^(に)願^(ねん)。永^(えい)セ^(せ)ヨト、千^(せん)章^(ちやう)茂^(まう)

學^(まな)ばんヨリ、一^(いつ)要^(やう)を^(を)聞^(き)ク不^(ふ)レ^(れ)如^(ごと)蓮^(れん)師^(し)ニ^(に)折^(せ)誓^(せい)して、法^(ぽう)の^(の)正^(しやう)理^(り)を^(を)得^(とく)む^(む)哀^(あい)茂^(まう)

可^(た)レ^(れ)願^(ねん)。又^(また)、御^(ご)定^(じやう)式^(しき)ニ^(に)化^(け)さ^(さ)も^(も)ふ^(ふ)ニ^(に)ハ、本^(ほん)館^(くわん)寺^(じ)開^(かい)山^(さん)日^(にち)存^(ぞん)上^(じやう)人^(にん)。尼^(に)崎^(き)

本^(ほん)興^(きやう)寺^(じ)開^(かい)山^(さん)日^(にち)道^(だう)上^(じやう)人^(にん)、盡^(じん)未^(み)來^(らい)際^(さい)、本^(ほん)館^(くわん)寺^(じ)ハ^(は)弘^(くわん)通^(つう)所^(じよ)、

本^(ほん)興^(きやう)寺^(じ)ハ^(は)學^(がく)門^(もん)所^(じよ)。大^(だい)上^(じやう)人^(にん)七^(しち)捨^(しゃ)才^(さい)之^(の)御^(ご)年^(ねん)ニ^(に)本^(ほん)興^(きやう)

寺ニおゐて、勸學院くわんがくいん造立ぞうりゅうして、退去たいきょましまへり。尚なほまゝ

二十二丁ウ

諸業しよたうを放絶ほうぜつし、三時弘経さんじきやうきやうの機き教きやうを明あきらめし、三益得悟さんえきとくごの時國しよこくを考かんがへ、
三國四師さんごくししの奥旨おくしめを究きまめ、三千餘冊さんぜんよさつの聖教しやうきやうを綴つづり、巻軸くわんぢやく
毎ごとに書かきもふて曰い。撰州尼崎本興寺流せんしゆにせきほんきやうじやうりゆうの實記じつぎと。宗しゆ
要等やうたうの深秘じんひの諸部しよぶは、多おほくハ、御年七十歳ごねんしちじゆうさい已後いごの制せい
作也。又、聖教しやうきやうに曰い。尼崎本興寺、元祖日存、日道

二十年にじふねんニ及およんで、諸流しよりゆうを伺うかがひ、諸御書しよごしよを拜はいし、愚老ぐらうにいたりたりる。兩師りやうしの流ながれを

二十三丁ヲ

汲くむ支し、四十年しよじゅうねん。恐おそく、御書ごしよの本疏ほんしよの淵底えんていを明あきらすと云い。又曰またい。吾われが門もん
徒分絶たふぶんぜつ。當宗たうしゆの一大支いちだいし、尼崎にせきの外ほか、絶たてて久ひさしく法門ほふもん也云。

寛正五甲申御年八十歳正月十二日。京都本能寺へ

越こせたをふ。二月五日尼崎本興寺へかゑらせたもふて

所ところ々ごと此門弟中へ、回文わいぶんを出だしたもふて、其そのの御詞ごしニ曰い。愚老ぐらうも

今年ことしハ死しとするいひず、對面たいめんを期きすべし。没後もつごの弘経之要きやうきやうのよふを

申(し)渡し(わ)し、履(は)き条(じょう)、不日(ふじつ)参詣(さんぎ)可有(あ)り、御田(ごでん)文出(ぶんい)したもふ。

同十八日(じゅうはちにち)ニ、所(ところ)々(ざ)尼崎(にさき)へ馳集(はせ)り候所(こうじよ)、大上人(おほおんじん)末世(まうせ)比(ひ)衆生(しゆじやう)に

二世成辨(じにせんじやうへん) 比(ひ)大利益(おほりやく) 本門(ほんもん)八品(はつひん)上行(じやうぎやう)所傳(じよでん) 南無妙法蓮華經(なんぶみょうほつれんげきやう) 二

限(かぎ)る(る)所(ところ)之(の)深旨(しんし) 宣説(せんじやく)ま(ま)をふ。又(また)俵(たわ)けて曰(い)わ。我(われ) 今句(こんく)を不

越(こ)して、寂滅(じやくめつ)に歸(かへ)す履(は)し。没後(ぼつご)二汝(なんぢ)等(らう)が 輩(たぐ) 學門(がくもん) 弘(ひろ)

通等(つうらう)浅(あ)き、おこた(お)ハる夏(なつ)な(な)あれ。此(こ)の(の)外(ほか)、遺語(いご)、御丁寧(ごていねい)ニ遊シ

二十三丁ウ

たもふ。自(みづか)ら 廿四日(にじゅうよっぴ)酉(うし)之刻(のとき)々(ざ)大曼院羅(だいまんいんら)に(に)向(むか)いたもふて、北面(ほくめん)ニ

端座(たんざ)し玉(たま)て、廿五日(にじゅうごにち)辰(たつ)之刻(のとき)、要品(じやうひん)を誦(じゆ)したもふ。衆徒(しゆどう) 同音(どうおん)ニ

誦(じゆ)神(しん)力(りき)品(ひん)之(の)偈(げ) 至(いた)り於(お)如来滅後(にょらいめつご)知佛所説(ちぶつじよせつ)

經句(きやうく)一(いつ)、大上人(おほおんじん)自(みづか)ら 磬(けい)を打(うち)たもふて去(こ)ゆ(ゆ)の(の)に、決定(けつじやう)無有(むぎやう)疑

句(く)お(お)ハりて、題目(だいまく)数(かず)十(じゆ)遍(へん)化(か)間(かん)ニ、唱音(じやうおん)永(なが)く絶(た)せたまへて

奄然(あんぜん)として、示寂(しじやく) 去(こ)をふ。諸弟(しよてい)、愁淚(しゆい)雨(あめ)乃(すなは)ち如(ごと)シ。諸

二十四丁ヲ

檀那(だんな)哭声(なき) 雷(かみなり)にふたり云(い)ふ。嗚呼(あゝ)嗚呼(あゝ)の(の)な(な)し(し)の(の)あ(あ)な(な)。

日隆大聖人御縁軌

無常を去めして、常をすゝむるハ、ぐち即 妙益。不
滅(を)證して滅を唱(ふる)ハ、一念寂照 比勝用。廿七日
七ツ時、入棺(を)をふ。日明 日積これを誦くす。廿八日
午之刻、茶毘。行 列如左

葬送 役者(の)次第

二十四丁ウ

四門

東

西

示佛知見門
入佛知見門

一番大炬 妙信 二番行器 法圓 三番大幡 慶乘

四番小幡 右日述日恵 左日倫日恵(35) 五番大寶華 右 旛栄 左 日俊

六番(36) 左 龜壽丸 福千代丸 虎壽丸 千代壽丸
右 慶壽丸 鶴壽丸 竹一丸 千代若丸 (37)

二十五丁ヲ

七番御骨箱 日善 日深 日純 深田 八番三具足燭臺 日円

香爐 日詳 華瓶 實祐 九番御位牌 本成院日淨

十番善繩⁽³⁸⁾ 御寺主 十一番桃燈⁽³⁹⁾ 前 左 日澄 後 左 實乘
右 日悟 右 慶順

右 円光坊 大乘坊 鏡像坊⁽⁴⁰⁾ 慶隆坊 成乘坊 前 勝運院日慰

十二番御輿 右常林坊 勝林坊 實光坊 本因坊 乘輪坊
左金山坊 妙光坊 正法坊 林泉坊 円乘坊

後円乘坊智鏡

左 久成院 金剛院 一乘院⁽⁴¹⁾ 常円院⁽⁴²⁾ 鏡林坊

二十五丁ウ

十三番天蓋 常住院日學 十四番草鞋 實隆 十五番鉢⁽⁴³⁾ 右 日嚴
左 日頭

鏡 右 日解 尊容忽昇栴檀之煙 給
左 日増

此日之酉戌之中門⁽⁴³⁾ 御取骨有之

御開山大聖人、御歳八十歳御示寂^(したも)を^(を)ふ。寛正五甲申二月廿五日^(に)、
今年寛政十貳庚申年迄、歳数三百三十七年^(に)二成。

寛政十二庚申九月写之 蓮屋^(と)写^(り)

註

- (1) この本の表裏の表紙は、本文と同じ紙で作られており、又、おもて表紙には改めて題簽も貼附されておらず、題は直に書かれている。尚、題字は本文と同筆である。
- (2) 「尚儀」の右横に「ヒサノリ」と朱書で帝訓されている。尚この朱書は後代の加筆と思われる。
- (3) 右様に「益子」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
- (4) 「公ハ」の右横に「トミ子」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
- (5) 「貳」字を墨書のままで消して、右傍に元の字と墨書で書いている。同じく干支の「乙丑」も同様に「甲子」となおされている。尚、おそらく本文と同筆であろうと思われる。
- (6) 「尚儀」の右横に朱書で「ヒサノリ」とある。後代の加筆であろうと思われる。
- (7) 日秀上人筆の『両山歴譜写書継稿』（以下『写書継稿』と略称）中の「兩寺開基日隆大上人夏縁起」中の当該部分では、「奥蔵ヲ明シテ一乘ニ長ズル瑞夢歟。」となっている。
- (8) 注(6)と同様
- (9) 「同年」の右横に「明德五」と朱書してある。後代の加筆と思われる。
- (10) この部分については、他の伝記書は全て應永十二年^{乙酉}十一月四日である。
- (11) 前掲の秀師『写書継稿』の当該法分は、「末法下種の時機を」となっている。
- (12) 前掲の秀師『写書継稿』によれば、この部分は、「半左衛門」となっている。
- (13) 「何某」の右横に、「山本宗句」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
- (14) 旁訓の右横に「危」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
- (15) 吉田東悟の『大日本地名辞書』には、「茨田」を「マムタ」・「マツタ」と読み、これを「やぶた」とは読んでいない。
- (16) 『續群書類従』所収の『細川系圖』によれば、細川満之は右京大夫に任じられている。
- (17) 註(16)所引の『細川系圖』によれば、満元の子は持元、持之、持賢の三人であり勝元は持之の子である。つまり勝元は満元の孫にあたる。尚その記載によれば、勝元は四十四才で卒している。他の資料も四十四才となっている。例せば『親長卿

- (18) 『東寺執行日記』『大乘院日記目錄』『武家年代記』『應仁記』『光勝院文書』『尊卑分脈』等。
 「影」字の左横に「エイ」と墨書の旁訓あり。おそらく本文とは異筆と思われる。
 註(18)と同様
 (19) 「あり尼崎に來り」の右横に、朱書で「患田安右衛門・小泉紋之助」と加筆されている。後代の加筆と思われる。
 (20) 「全」字の左横に「ぜん」と墨書あり。おそらくは異筆であろう。
 (21) 「成」字の右横に「介」の墨書あり。異筆か同筆かは、わからない。
 (22) 「徒」の左横に「トモガラ」と旁訓が墨書されている。が、同筆・異筆の区別は、わからない。
 (23) 「同年」の右横に「永享」の朱書あり。後代のものであろう。
 (24) 「や日」の字の右横に、「本果院」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (25) 「しく京」の字の左横に、「南都ニ」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (26) 「御かたはら」の右横に「定源院日典ト云」朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (27) この「日曲」とあるのは、いうまでもなく日典上人のことである。また原文には朱書で「曲」字の下に「ハ」を付加している。つまり「典」字に修正したものである。しかし、この朱書の二画は、後世の加筆と思われる。尚これ以後の「日典」と書くべきところもすべて「日曲」と書いている。
 (28) 「とはぎ」の右横に、「諺云」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (29) 「防護」と旁訓の間に、「保」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (30) 「セ」の字の右横に「求」と朱書されている。後代の加筆と思われる。
 (31) 「本疏」とあるのは「本疏」であろう。また読みは「ほんしょ」あるいは「ほんそ」と読むべきである。
 (32) 「誦^ッ神力品之偈^キ」と読むべきであろう。
 (33) 秀師の『写書継稿』の当該部引には、「供時相即之妙益」とある。
 (34) 「日要」のまちがいであろう。日寛筆の『隆師尊縁記』(以下「寛記」と略す。)の当該部分は、「日要」となっている。
 (35)

- (36) 「寛記」の当該部分は、「六番小炬」とある。
- (37) 「寛記」の当該部分は、「鶴」字が「蠶」字になっている。当「蠶」は「鶴」字のことであり、「鶴」とは同じ意味である。
- (38) 「寛記」の記載は当記と同一であるが、『法華宗法式作法要典』所収の『三七日忌日法則』によれば、「善綱」となっている。
- (39) 「寛記」の当該部分が虫損のため、確認できないが、おそらく「挑燈」であろう。
- (40) 「寛記」によると、「鏡像院」と修正してある。
- (41) 「寛記」によると、「一乗坊」となっている。
- (42) 「寛記」によると、「常円坊」となっている。
- (43) 「寛記」によると、「門」の字は、「間」となっている。

付記

本文を活字にするにあたり、可能なかぎり、原文に忠実に活字にした。ただし、原文使用の女手の仮名をそのまま使用すれば、あまりに繁雑なため、旁訓にかぎり、現在使用されている仮名文字に改めた。また編者が添加した文字等は、() を付して原文と区別し、また句読点を付して読者に便ならしめた。

(校訂 和田晃尚)